

---

# First Love

廉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

First Love

### 【Nコード】

N2475E

### 【作者名】

廉

### 【あらすじ】

女の子にはモテるが、いまだに本気で恋をしたことがない大学生の省吾。2年生になったある日、新しく下宿することになったのは、近所の高校の不思議な寮だった。開かずの間、突如現れる謎の絵、8人目の住人……。そして、誰も顔を知らない管理人さん。不思議な生活に振り回されながらも、次第に省吾は1人の少女に惹かれていくが、初めての感情に素直になれないでいた。・・・この恋どうなる？

## 第1回 新居（前書き）

お久しぶりです。廉です。

とりあえず気長に読んでくださると  
嬉しいです。

## 第1回 新居

「もう帰っちゃうのー？」

面倒くさいから起こさないようにしたつもりだったが、しまった。起こしてしまつたらしい。俺、坂井省吾（しんご）はとりあえずいつものように営業スマイルを浮かべて、ついさっきまで隣で寝ていた名前も知らない女に答えた。

「今日は新しい家に引っ越すんだよ」

「また会ってくれる？」

女はうるうるとした瞳で俺を見ってくる。こういうのに男は弱いのかも知れないが、俺の場合はTPOがある。こんな状況でなければ一瞬でグサツときただろうが、今は逆にむかむかとしてくる。

「メールする」

もう会うことはないだろうな・・・胸中でそう思ったが、決して態度には出さずに部屋を飛び出した。

自慢ではないが、昔から女にはすごくモテていた。

最初に女とつきあつたのは、中学生のときだった。クラスの女友達から突然つきあつてほしいと告白された。それから、度々告白されて、中学だけで告白された女の子の数は軽く10人を超えた。高校を入れると、もっと大きな数になるだろう。

だけど、どの女の子とも長くは続かなかつた。原因は俺自身。俺はいつだって誰のことも本気で好きになつたことがないんだろう。

大学生になつた今でも、合コンではたいてい女の子のほうからラブホテルに誘われるし、つきあつた女の子は多い。

そんな生活を送ってきたせいか、俺も軽い人間になつた。好きだと言ってくれた女は抱いてきた。美人な女に弱くなつた。例え、本気でないとしても。

こんな生活がずっと続いていくと思つていた。

少なくとも今までは……………

大学2年生になって、ようやく1人暮らしができる余裕ができた。実家から大学に通うのは結構遠すぎて、大学の傍に下宿することにしたのだ。

しかし、不動産屋に掛け合ってみたが、実際に1人暮らしは高い。今まで貯めてきたバイトのお金と親の仕送りの範囲内で生活できる家はなかなかなかった。

そんな中でようやく見つけたのが大学から徒歩8分のアパート。やたらと金がかからないのが気になるが、安いのにには変えられない。

『つばめ荘』302号室。今日からここが俺の家だ。  
ふと、隣近所に挨拶するべきだと気づいた。田舎のじーちゃんから送られてきたリングを持って、とりあえず301号室に挨拶しに行く。

呼び鈴を押して、出てきたのは意外にも俺よりも年下だった。色黒で短髪な男。ぱっと見たただけだと、ばりばりのスポーツマンに見える。

「今日隣に引っ越してきた坂井です」  
「ああ！管理人さんから話は聞いてましたよ！わー、すごい男前な人だなー。あっ俺、菅原達也すがわらつていいいます。高3です。これからよろしくお願いします！」

白い歯を光らせて、その男は言った。こんなに若いのにもう1人暮らししているんだなと考えながら、俺は303号室を訪ねる。

「……………夏川です。よろしくお願いします」  
髪を芸もなく肩まで伸ばした年下の女。菅原と違って無愛想な人だ。

「本当に大学生ツスか！俺は立花渚たちばななほツス。よろしくツス」  
202号室の男。黒いニット帽に赤いゴーグルをかけていて顔がはつきりと見えない。

「わざわざありがとっございます。私は広瀬です。何か困ったこと

がありましたら、いつでもおっしゃってください。困ったときはお互い様ですから」

「じゃあ、聞きたいんだけど、なんでここって高校生っぽい人が多いんですか？」

俺は402号室のポニーテールの女に尋ねた。こんなに高校生が多いなんてさすがに変だ。

しかし、広瀬さんはきよとしたような顔をする。

「だってここは燕坂高校つばさかの寮ですよ？ここには高校生以外はいはずです」

「うっそ！？俺、不動産屋さんから何にも聞いてないよ！」

「1年に1回、管理人さんの気まぐれで1人だけ外部の人を受け入れるんです。聞いてませんでした？」

聞いてない。そもそも管理人さんに会ってすらいないんだから。

俺は丁寧にお礼を言っつて、1階の管理人室に向かって行った。

管理人室は空だった。さすがに中に入るわけにもいかないが、事情を説明してほしくて俺はうろろしていた。

そのとき、背後のエレベーターが1階に降りてきた。何気なく見ていると、中から髪の毛の長いお嬢様のような女が出てくる。

美人だった。

無意識に見惚れてしまったらしく、俺はその人と目が合った。彼女はやわらかく微笑んで俺の隣を通り過ぎる。

へー・・・こんなかわいい子もいるんだ。

ちよつとここでの生活に興味を持ってしまった。

その夜、突然の来訪者たちがやって来た。

「じゃあ初めつましょー！！カンパニー！！！」

なぜか昼間挨拶した4人の男女が俺の部屋に集まって、オードブルの食材をたくさん運び込んできた。俺が混乱している間に、今日片付けたばかりの部屋が宴会場になる。

「坂井さんって下の名前何ていうんですか!？」

「省吾」

注がれたチューハイを飲みながら答える。

「っていうか、これ何の宴会のつもりなの？」

「決まってるじゃないですか。省吾さんの歓迎パーティーです」

ハイテンションな菅原。

「この寮に泊まってる人って4人だけ？」

「違うツスよ。あと2人いるんスけど、今日はいないツスね」

「へー」

あの美人な女の人はその1人かなと想像していたら、むせた。肺にチューハイが入りそうになって激しく咳き込んでしまった。

「大丈夫ですか？」

心配そうに背中をさすってくれる広瀬さん。そして、俺の目の前には俺が咳で飛ばしたチューハイを顔にかけて夏川さんの姿があった。さすがにげっと思った。

「ごめん・・・!急に・・・げほっ・・・肺にげほっ・・・入って・・・」

「・・・だからってこんな豪快に飛ばしますか」

明らかに怒気を含んだ声の夏川さんが怖い。俺は大人しくしゅんとなった。

歓迎パーティーとやらは夜通し進んだ。昨日の合コンから飲みっぱなしでさすがに疲れたが、朝起きてみると俺の部屋からは誰もいなくなっていた。

このアパートは安くて助かる。他の部屋の人もいい人そうだし、ここでなら生活していくのに問題はないだろう。しかし、昨日広瀬さんが気になることを言っていた。

『1年に1回、管理人さんの気まぐれで1人だけ外部の人を受け入れるんです』

ということは、俺がここに住めるのは1年だけなのだろうか。確

かに、ここを借りたとき1年契約だったが、俺としてはその後も継続して暮らすつもりだった。1年たって追い出されたらたまったもんじゃない。

やっぱり管理人さんに話してみよう。頭痛を抑えて立ち上がると尻ポケットに入っていたケータイが振動する。メールだった。

相手は中田とかいう聞き覚えのない女の名前だった。しかし、内容を読んでその存在に心当たりを覚えた。おととい合コンで会った人だ。そういえば、メールするとか言っただけで忘れていた。

メールに返事を返すべきか迷いながら一歩踏み出すと、何かをぐしゃっと踏みつけて俺はバランスを崩す。と同時に、女の悲鳴が聞こえて何かが起き上がる。

余計ひどくなつた頭痛を抑えながら俺も起き上がる。

「下向いて歩いてください」

誰もいないと思っていた。しかし、いた。明らかに不機嫌そうな顔の女が。303号室の夏川さんが。

「なんでこんな所に寝てるんだよ？」

ローテンションで微妙にいらいらしていた俺はつい口調を荒げってしまった。それでも相手は怯まない。

「しょうがないでしょ。1度寝たら私起きれないんです」

「じゃあ俺もしょうがないよ。寝てるなんて思わなかったし、わざとじゃないし」

「私が言ってるのは謝れってことです。昨日も私に唾ぶつ飛ばしたの忘れたなんて言わせませんから」

「だからわざとじゃないんだよ。たまたま俺の行動しようとするほうにアンタがいるの」

「あーそうですか。それはすみませんでした」

「いーえ。俺もアンタのどかいケツを見落としてたんで」

「このハゲ！お邪魔しました！！」

ばたんと豪快にドアが閉まる。誰がハゲだ。

高校生相手に何言ってるんだ。俺は頭を抱えながら管理人室を訪れる。しかし、受付にはカーテンがかかっていて、呼び鈴を押しても応答がない。

「なんであんなふうと言っちゃったんだろー……」

今まで女性に対して、あんなふうに口ゲンカになったことはない。

「っていつか、管理人さんはなんでいないんだよー……」

俺は後になってから気づく。

つばめ荘の七不思議の1つが管理人さんだということに。

## 第2回 奇妙のはじまり

4月になって、大学の近所においしいと評判の焼肉屋ができた。金曜日、俺は友達と一緒に食べに行くことにした。

「こないだの南ちゃんとはどうなった？」

案の定、酔いの回り始めた友達、進藤（ついでに）にからまれる。酔っていた俺は露骨（さうじゅう）に嫌そうな表情になる。

「べつつにー。メールはしてるよ」

「なんでー・・・告られたんだろー？つきあわねーのかよ」

「つか、進藤飲みすぎだつつの」

人の話を聞いているのか、進藤はよろよろと頭を動かしながら、虚ろな目で俺を見てくる。なんとなく軽く目つぶしを試してみても「くすぐつてーよー」とか言っただけだった。そろそろやばいかもしれない。

合コンで知り合った女の子、中田南。彼女になりたいみたいなのを言われたが、俺はその度にはぐらかしている。彼女には悪いが、たぶん好きになることはない、と言ってみたが、逆にそれでも傍にいたいと言われてしまった。

俺には気になる人がいる。『つばめ荘』でエレベーターから降りてきたかわいい女性。いまだにその人が誰なのかわからない。

ふと、つばめ荘のことを思い出すと同時に、1つの用事を思い出した。

「やつべ！悪い、進藤。俺もう帰るわ」

「マジかよー」

他のみんなにも一言言っただけから、俺は下宿先に猛スピードで駆けていった。

最初に言っておくが、俺の通う大学は県内トップと言われる国立のN大学だった。別に天才的な頭脳を持っていたわけではない。純

粹に憧れていた先生がこの大学出身で、E判定から地道に努力した結果、見事に合格したのだ。

俺がN大学の学生だと知った菅原と立花が勉強を教えてほしいと言ってきた。今日がその日だった。

1階の大広間に行くと、待ちくたびれたかのように待っていたスポーツマンと赤いゴーグル男が俺に手招きをする。ちらりと傍の管理人室を覗いたが、電気は点いているようだがやっぱり無人のようだった。

「わっ！省吾ちひみちさん、酒臭いですよ！飲んできましたね」

「悪い・・・そんなに酔ってないから大丈夫だと思うけど・・・なあ、今日も管理人さんいないんだ？」

「管理人さん？さっき見ましたよ？ちょうど出かけていくところを」初めて聞いた目撃情報に、俺はがばつと身を乗り出す。なんでもないことのように菅原は目をぱちくりとしている。

「マジか・・・俺、ここに越してきてから1度も管理人さんに会ったことないんだよ。挨拶しなきゃな」

「俺も3年間ここに住んでるけど、管理人さんに会ったことないっすよ？」

「俺もだよ。後姿とか遠くからなら見たことあるんだけど」

「そうっすよね。広瀬たちも見たことないって言ってたっす」

なんだ、ソレ。俺は高校生2人の会話を信じられない思いで見えていた。昔、小さな寮の管理人さんとその住人たちのコメディ漫画があつたが、ここではそんなことはかけらも起こらないらしい。

「なんかすごいな、ここのって。俺なんかまだ1度も会ったことない住人いるし。会わないのばっかだな」

「そんなことないですよ。いるはずもない住人・・・7人目・・・省吾さんが入ったので8人目かな？とにかく8人目の住人を見かけたって話も聞きますよ。実際に俺も見ましたし」

俺は口の端が痙攣けいれんするのを感じた。掘れば芋づる式にいろいろなことが出てくるのかもしれない。

勉強を教えている間に管理人さんが帰ってこないかと期待していたが、結局10時を過ぎても帰ることはなかった。

翌朝、1階の大広間にケータイを忘れてきたことに気づいて、朝一番に取りに行つて部屋に戻つてくると、ちよつとごみを出そうとしていたジャージ姿の夏川に出くわした。

歓迎パーティのときからまともに会話した覚えがない。

「よう。朝からすげー寝癖だな」

ただ挨拶をしようと思っただけなのに、出た言葉は考えていたものとは違つた。

「そちらこそ、朝帰りご苦労様です」

「ご苦労はお互い様じゃない？寝癖は直すの大変だよ？」

「そうですね。ハゲは寝癖なんてつかなくて楽そうですね」

この子相手だとやっぱり口ゲンカになる。なんか苦手なんだよ、夏川つて。

何気なくケータイを見ると、未読のメールが何件か届いていた。

全て中田南からのメールで俺は無意識にウンザリしてしまった。

「彼女に浮気でもバレたんですか？」

後ろからザマーミロというような顔の夏川。俺はべつと舌を出した。

「俺、超モツテモテだから」

「へー。みんな見る目ないですね」

かわいくない。答える代わりにドアを閉めて、そのままたれかかる。

イライラしているのは、夏川の言葉になのか。それとも、俺自身になのかわからなかった。

今日のバイトは午後からだつた。俺はすることもなく家でごろごろとしていると、突然外でがんと何かがぶつかる大きな音がした。怪訝けげんに思つて、玄関のドアを開けると見覚えのない後姿を見た。

ちょうどエレベーターの中に入っていく。

「待つ……！」

思わず声をあげたが、エレベーターはそのまま下に降りていった。今の誰だ？ここには確か6人の高校生がいるはずだ。まだ俺が会ったことのない人かもしれない。だけど・・・なんとなくだけど、昨日菅原たちが言っていた8人目の人のような気がする。いや、誰も顔を知らない管理人さんかもしれない。根拠はないけど……

しばらくエレベーターの前でぼーっと突っ立っていると、今度はエレベーターが登ってきた。一瞬、さっきの人かと思ったが、3階で停まったエレベーターから降りてきたのは菅原だった。

「どうかしました？」

呆然として見てしまったのか、不思議そうな顔で夏川が睨んでくる。俺はふるふると首を振って何も無いことを伝える。

「あのさ、エレベーターに乗るとき、誰か乗ってなかった？」

「誰も乗ってなかったですけど……」

「じゃあ、こないだの歓迎パーティのときに来なかった他の高校生ってどんな人たち？」

「矢吹と香坂のことですか？矢吹が男子で、香坂が女子です。2人も今は実家に帰ってるみたいなんですよ」

「実家？」

俺はきょとんとして聞き返す。

「はい。つばめ荘って、すごく家の遠い人が、事情があつて1人暮らしをする人しか住んでないんですよ。それに、来年から寮が変わるので、今は3年生しかいないんです」

「変わるの？そんな話聞いてないよ！」

「あつ、取り壊すわけじゃないみたいですよ？ここはたぶん一般人専用のアパートにするんだと思います」

菅原がそう言ったとき、俺のケータイが鳴った。また中田だろうとウンザリしながら見ると、今アパートの前まで来ているとのメー

ルが届いていた。さすがにどきつとしてしまった。

「あ・・・俺、ちょっと用事できたわ。じゃーな」

「はい。また今度勉強教えてください」

菅原の言葉を背中で聞きながら、俺はエレベーターのほうに走っていった。なにか別の言葉が聞こえた気がしたが、俺は立ち止まらなかった。

しかし、エレベーターは5階で停まったつきり動かなかった。5階で誰か乗っているのだろうか。

いや、そのとき思い出した。前に菅原に聞いたことがある。

2階に住んでいるのが立花と俺の会ったことのない人。3階が菅原と俺と夏川。4階が広瀬ともう1人の俺の会ったことのない人。5階が最上階だが、誰も住んでいないと言っていた。

エレベーターは5階でまだ停まっているので、俺は階段で下に下りることにした。

だが、階段を一步踏み出したときだ。背後でチンとエレベーターの箱が停まる音がした。ボタンを押していたからだ。

急いで見てみると、エレベーターの扉が開くと同時にすぐに閉まってしまった。

機械的な閉まり方ではない。明らかに人為的な閉め方。箱が動き出す。

俺は無意識に猛スピードで階段を下りた。

しかし、1階に到着したときには、すでにエレベーターは到着していて、扉が開いていた。乗っていたと思われる誰かはもう降りた後のようだった。

「省吾君」

気づくと、隣に中田の姿があった。俺は一瞬彼女のことを忘れてしまったので、見つけたとき少し驚いてしまった。

「突然来ちゃってごめんね。あのね・・・家に、今いづらいの・・・だから」

「ああ、うん。ちょっと話変わるんだけど、今エレベーターから誰か降りてこなかった？」

たぶん俺はものすごく場違いな質問をしたのだろう。中田の決死の告白を俺は遮ってしまったのだ。彼女は戸惑ったような顔をした。「……女の人が1人降りてきたけど……」

女の人？ 思いつくのは2人だけ。それとも、俺が1度だけ見たことがあるお嬢様のような人だろうか。再度質問しようと思ったとき、今度は中田に遮られた。首に手を回されて、無理やりキスをされる。そのとき、俺は視界の隅に誰かの姿を見た。背格好から見て夏川だろう。彼女が驚いた顔で俺たちを見ている。それを認めた瞬間、無意識に彼女の体を離れた。

「省吾君……?」

「俺の部屋に来いよ」

有無を言わず、手を握ってエレベーターに向かっていく。彼女もそれが目的だったためか、おとなしくついてきている。

なぜか夏川の姿が脳裏に焼きついて離れなかった。やっぱり苦手なんだよ、夏川は。

## 第2回 奇妙のはじまり（後書き）

なんだか怪奇現象ですね・・・

次回は開かずの間が出てくる予定です。

開かずの間・・・？開くのかもしれませんが。

で、この小説の題名のようにこれは初恋の話だから、  
並行して恋愛も進んでいく予定です。

まだ話は続いていきますが、どうかもう少しお付き合いいただけ  
らなと思います・・・

### 第3回 開かずの間 前編

月曜日、新聞を取りに1階の郵便受けまで行くと、広瀬と夏川に出くわした。ちょうど2人も新聞を取りに来たらしい。

「おはようございます」

広瀬がにこやかな笑顔を浮かべてくる。俺は彼女のこういふ愛想の良いところがいいと思う。きつと学校でモテるだろうなと考えていたら、明らかに視線をそらしている夏川が目に入った。

「なんだよ？」

3階の廊下で2人きりになったとき、俺は先を歩く夏川に声をかけた。

「俺に言いたいことがあるんだったら、はっきり言えばいいだろ」

「じゃあ言わせてもらいますけど、あなたの彼女に壁蹴るなっ言っておいてください。これでも受験生なんです。気が散って集中できない」

夏川の言いたいことがなんとなくわかった。彼女ではないが、中田は結局日曜日の朝まで俺の部屋にいたのだ。

ばつが悪くなって俺は新聞を開きながら歩く。世間では、どうやら殺人事件というものが起こっているらしい。高校3年生の男が受験ノイローゼで人殺しだとか。

そういえば、ここにいるみんなは受験生だ。菅原と立花の様子だと、どうやら大学受験を希望していそうだが、広瀬と夏川はどうなのだろうか。4人の通う高校がどのくらいの偏差値の学校なのか俺は知らなかった。

そうしているうちに、夏川は自分の部屋に無言で入っていった。まった。

出かけていくとき、無意識にエレベーターを避けるようになった。はつきり言っつて、この『つばめ荘』はおかしなことだらけで、俺

に言わせれば、立花がなぜ赤いゴーグルをいつも身につけているのかも気になるところである。何か深い事情があるのかもしれないとあえて聞くことはしないが。

女の悲鳴が聞こえたのは、4限が終わってまっすぐ帰宅したときのことだった。

つばめ荘の1階大広間に響き渡る大きな声が聞こえた。俺はその場で立ち止まって、どうすることもできずに情けなくおろおろとしてしまった。しかし、すぐにエレベーターが5階に停まっていることに気づく。

と、背後から菅原、立花、広瀬の3人が寮に帰ってきた。

「どうしたんスか？」

立花がコンビニの袋をぶらさげて尋ねる。

「今・・・女の悲鳴が・・・」

「ああ。たまに聞こえるんスよ」

なんでもないことのように言うが、俺は内心で焦っていた。今は女の声だ。ここにいる女は広瀬の他に夏川だけ。違うのかもしれないが、彼女ではないと言い切れない。

俺はダッシュで階段を駆け上った。階段を2個飛ばしで上がり、今まで来たことのない5階に初めて立った。

5階は他の階の造りとは多少違っていた。

まず、屋上がないためなのか上への階段がない。それから、廊下の1番奥にはバルコニーがある。そして、なにより・・・いくつがあるドアの1つがごつい南京錠と鎖で封鎖されていた。

俺はその部屋の前で立ち止まった。

なぜだろう。すごく気味が悪い。たかがドアに南京錠をつける必要があるのだろうか。

「省吾さん！どうしたんですか!？」

俺の後を追いかけてきたらしい。ばたばたとさっきの3人が駆け

寄ってきた。俺は彼らのほうを見ずに、ドアを見て呟いた。

「ここ、なんかあったの？」

「あー・・・開かずの間ですね。俺たちもよく知らないんですよ。初めてこれを見たときはさすがに怖かったですけど」

「そうだよね。なんかお化けとか出てきそうで・・・」

広瀬も顔をしかめる。

俺は試しにドアをコンコンと叩いてみた。3人が驚いているのが心配でわかったが、それでも構わなかった。返事はない。代わりに、風が正面から吹きつけてきたような錯覚を覚えた。

夏川は大丈夫だろうか。今度は3階に下りて、303号室の呼び鈴を押してみた。

「どうしたの？みんなして」

彼女は心底意外そうな顔で出迎えた。

「いや、今変な悲鳴が聞こえてきたじゃない？」

代表して広瀬が答えると、夏川はへーとまた意外そうな顔になる。「部屋にいたから聞こえなかったよ」

「ちょうど私たち下にいたの。私と省吾さんは学校帰りで、菅原と立花はコンビニに行ってたみたいで。だから、その悲鳴が瑠璃の悲鳴かもしれないから省吾さんが血相変えちゃって」

なんだかちよっと違う気もしたが、俺はつつこむことはしなかった。今さらだが、夏川の下の名前は瑠璃というのか。

それにしても、さっきの悲鳴は何だったのだろうか。普通、5階に用がなかったら誰も行かないはずだ。

「なあ・・・ここに屋上つてあるのか？」

「え？階段がないからないんじゃないんですか？」

広瀬の言葉に俺は黙って頷く。今このとき、俺の中で何かを決意した。

午後11時。3階の廊下に誰もいないことを確認して、俺は音を立てずに歩き出す。

「どこ行くんですか？」

女の声が背後にかかったときにはさすがに驚いた。慌てて振り返ると、ドアを少し開けて顔だけ覗かしている夏川の姿があった。抜き足差し足で歩いていたため、変な格好なまま目が合った。

「謎の悲鳴の正体を突き止めにいくのなら、私も付き合います」

「いや、違うから。今からデートなの」

「こんな時間に、ジャージですか？」

お互いにジャージ姿で向かい合った。何を言ってもついてくるつもりらしいので、俺は折れた。無言で5階に向かうと、とととと彼女がついてくる。

「もしかして、開かずの間に行くんですか？」

「そうだよ。俺は気になるとことん調べちゃう性質なんだよ」

「執念深い性格ですね」

「だったらついてくんよ。」

5階はやっぱり人気がなかったが、誰もいないことを確認してから例の部屋の前に立つ。すると、妙な違和感を覚えた。

隣に立った夏川もそれを理解したらしい。

「南京錠が・・・開いてる」

それに、銀の鎖も床に落ちている。誰かがなんらかの目的で開けたんだ。

俺はゆっくりとドアノブに手をかける。ドアに抵抗があるのかと思っただが、すんなりと開いてしまった。一瞬、風が顔に吹きつける。

「夏川・・・先に行けよ」

「はあ？男だったら先に行ってくださいよ」

「怖いだろー！」

「いくじなし！」

そう言われて、どんっと背中を押される。勢いあまって前のめりに倒れるのと同じに夏川も倒れこんでくる。もろに体当たりをくらって、しばらく息がでなかつたが、なんとか起き上がる。

少し中を見渡してみた。とは言っても、中はダンボール箱が山積み  
みにされているだけで、ぱっと見ただけだと物置に見える。死体で  
も隠されていたらどうしようかと今さらになってから思った。

「ねえ、あれ」

袖を引つ張られて、彼女に示された方向を見る。階段だった。上  
へと続く階段がそこにはあった。

「どこに出るんだろ」

「屋根裏部屋とか。屋上っていう手もあるか」

俺がその階段へ足を踏み出した瞬間だった。遠くの方でチンとエ  
レベーター特有の音が聞こえた。誰かが5階に来たようだ。

「隠れるぞ」

小声で彼女の手を引いて、傍の大きなダンボール箱の陰に隠れる。  
なるべく息遣いが聞こえないようにじっと待つ。足音が聞こえた。  
こつこつこつ。ハイヒールでも履いているのだろうか。それなら、  
女？

足音はドアの前で止まった。音がしない。

怖い。振り返ったら背後に何か立っていそつだ。

時間だけが過ぎていく。

やがて、がちやんと場違いな音がしてはっとした。

何の音だ？俺は無意識に振り返ると、さっきまで見えていたもの  
が見えなくなっていた。それは、5階の廊下。今はドアが閉まって  
いる。

嫌な予感がした。俺は急いでドアへと向かう………やつぱ  
りだ。鍵が閉まっている。正確には、南京錠が閉められているのだ  
ろう。

「閉じ込められた」

夏川の方を向くと、彼女はなんと放心していた。

絶体絶命とはこういうことを言うのだろうか。

### 第3回 開かずの間 前編 (後書き)

開かずの間・・・開いたし。

なんてつつこまないでください、どうか。

次回、開かずの間解決(?) 編です。

いや、別に解決も何も・・・さわりだけですけど。

あまり長編にするつもりはないので、

これから少しずつ説明されていくと思います。

では・・・

#### 第4回 開かずの間 後編

「降りれそう？」

「無理だな。さすがに5階だし、せめてロープかなんかがあったら  
だけど・・・」

開かずの間に閉じ込められた俺と夏川は部屋の窓から下を見下ろ  
してため息をついた。

ドアには南京錠。5階。ケータイは持っていない。本当に閉じ込  
められてしまったのだ。こいいううとき、ドラマのヒーローなんか  
はなんとかして脱出するのだろうが、今の俺には成す術もない。隣  
でうずくまっている女の子に励ましの言葉をかけてやることもでき  
ない。

「なんで俺についてきたんだよ」

出てきたのはそんな言葉だった。励ますどころか彼女の行動を非  
難しているかのようにも聞こえる。

「別に・・・好奇心です。そっちだってデートすっぽかしちゃって  
いいんですか？」

「別に・・・彼女なんていないし」

「え？こないだ1階にいた人って彼女じゃないんですか？」

それは驚きというよりかは、彼女ではない人と何やってるんだと  
いう非難の色が含まれていた。俺は立場が悪くなって目をそらす。

「ただの友達」

そこで会話が強制終了になってしまった。俺はここからどう出よ  
うか考えながら、隣の夏川をちらっと見た。ひよっとして、今受験  
勉強の途中だったんじゃないかと思いついてしまったからだ。

「夏川さ、大学受験すんの？」

「ああ、はい・・・一応」

「へーどこの大学？」

自然な話の流れだと思ったのだが、急に彼女は黙り込んでしまっ

た。志望校を言いたがらない人は確かにクラスでもいたが、そこまで悩むほどののだろうか？

しばらくして、夏川が口を開いたときにはたっぷり5分くらい時間がかかったように思えた。

「………N大学です」

「マジ！？ウチの大学なの？」

「今絶対お前には無理だって思いましたよね？内心本当は笑ってませんか？」

「そんなこと思わないよ。本気で目指してるなら、俺は応援する」

言いながら、夏川とまともに話したのは初めてかもしれないと考えていた。なんでだろう。よくわからないけれど、彼女と話するのはなぜか楽しい。それに、もっと話していたいと思うようになる。こんな感情を女に抱いたのは初めてだった。

「勉強とか、わからないところがあつたら聞きにこれば？」

「遠慮します。金とか取られたらやだし」

「かつわいくねー」

すぐにいつもどおりに戻ってしまふ。こんなことを話したいわけではないのに……

しばらくして、俺は急な好奇心にかられて部屋の階段を上ってみようと思いはじめた。

「上へ行くんですか？」

さすがに慌てた様子で、夏川が尋ねてくる。俺はこくと頷いた。

「どこに出るのか気にならねー？」

「別に」

「じゃあ、そこで待ってるよ。俺ちょっと上行ってくるから」

暗い階段を俺はゆっくりと上がっていくと、夏川もついてきた。

俺が振り返ると、明らかに1人にされるのが怖いのが見え見えなのだが、平静を保とうとしているのがわかる。

階段を上りきると、1つのドアがあった。鍵がかかっているのか

と思えば、ドアノブはすんなりと開いた。

「行くぞ」

ぎいっというきしみをたててドアが開かれた。

そこは屋上だった。

特に驚くことでもなんでもない、ごくごく普通の屋上。しかし、ここに屋上があると初めて知ったので、この普通の光景になぜだか感動してしまった。

後から来た夏川もその光景に驚いていた。

「あの部屋は屋上への入り口だったのか・・・」

呟いた後、おかしなことに気づいた。明らかに後からつけられたような階段。それも、人を寄せ付けないような重々しい雰囲気をもとって・・・まるでここに人が来るのを拒んでいるかのようにだった。

「ねえ・・・あれ」

ふいに夏川に言われて、俺は振り返る。彼女は俺とは反対の方を見て何かを指さしていた。

見ると、そこにはフェンスがなかった。他の所は落ちないようにちゃんとフェンスがあるのだが、ある一角にだけない。つまり、取れてしまったということになる。

「もしかして、ここを修理するよりも屋上を封鎖したほうが経済的に助かるっていうことなのかな？」

「そうですねー・・・なんかドアに鎖までつけてちょっと怖いんですけど」

心底嫌そうな顔で夏川は言い放つ。確かにその通りだ。

「たまに聞こえてくる悲鳴ってここからなんですかね？」

それを考えると恐ろしくなる。まさかここから誰かが落ちているわけではないだろう。

もし入り口を閉めた人がヒールのある靴を履いた人だとしたら、やっぱり犯人は女性だという可能性が高くなる。ここにいる女の人・・・広瀬と今はいないらしい香坂という人、それから俺が以前

見たお嬢様のような人。あの人は一体何者なのだろうか？

「夏川・・・お前、ここでお嬢様みたいな格好の女の人、見たことあるか？」

「お嬢様・・・？それって管理人さんのことですか？」

「えっ！？管理人さんを知ってるの？」

「知らないです。でも、時々廊下で見かける管理人っぽい人がそういう格好してるんで・・・」

「そっか・・・そういう考え方もあるか」

俺はちらりと夏川を見た。こんなふうにしっくりと彼女を見たのは初めてだった。横顔、結構かわいい顔してるじゃないか。

俺が自分の気持ちに気づくのは割とすぐ後のことだった。

翌朝、何かがばしーんと倒れるような音で目が覚めた。俺ははつとして起き上がる。いつのまにか眠ってしまったらしい。遠くの方で夏川が小さくなって眠っている。

5階の廊下に誰がいる。俺は気づいてもらいたくてドアをばんばんと思いつき叩いた。

「すみません！開けてください！鍵がかかって出られないんです！」

しかし、音はもう聞こえなくなってしまった。俺の声に気づいたのか、のろのろと夏川が起き上がって俺の後ろまでやって来る。

「人がいるんですか？」

「わかんない。なんか音がしたから」

もう聞こえなくなったが。しかし、天は俺たちに見方をしていて。すぐにチンという音が聞こえたかと思うと、急にドアの外でがちゃがちゃと音がした。たぶん南京錠を開ける音だろう。助かった・・・

しかし、ここを出たらまた夏川とは今までと同じようにしか話せなくなる。なぜだかそれがすごくもつたいないことのように思えた。開けてくれたのは寮の掃除のおばさんだった。

「あれま。2人して何やってんだがね」

「不注意で出られなくなっちゃってしまっただけです。開けてくださってあげりかとうございます」

目を丸くするおばさんに、俺たちは深々と頭を下げた。

「なんか変な音がすっと思ってる管理人的な部屋から鍵取ってきたさ、あんたらここは入ったらだめだが。元々屋上への入り口だったんだが、数年前に落ちた人がいるんだと。あんたらも気をつけなだめだが」

はいと頷きながら、一体おばさんはどこの方言を話しているのだろうかと考えていた。

それにしても、鍵は管理人さんの部屋から取ってきたらしい。となると、やっぱりここを閉めたのは管理人さんなんだろうか？

とにかく俺たちは救出された。

数年前に落ちた人を調べてみたら、案外簡単にその記事を見つかることができた。

今から7年前の5月。燕坂高校の体育祭の日だった。その日、突然3年C組の生徒の1人が行方不明になったらしい。彼女のいない種目の穴は棄権にしろもらい、担任は彼女を必死になって捜した。しかし、どこを捜しても見つからない。そして、彼女はその日の夕方、つばめ寮の屋上から転落して死亡したことが判明。警察は受験ノイローゼによる自殺として捜査を進めたらしい。名前は夏川志保<sup>しほ</sup>。そして、そのときに重要参考人として管理人さんが連れて行かれたらしい。

こここの寮にはそんな裏が隠れていたのか・・・

いや、それよりも俺は死んだ生徒の名前が気になってしまった。

#### 第4回 開かずの間 後編 (後書き)

元々短編と中編の間くらいで書こうと思っていたのですが・・・  
難しいですね。もう後半に入ったのですが。

今回は8人目の住人と夏川の過去を  
書くつもりです。

余談ですが、おしどり夫婦へが好評なため、  
続編を書こうか検討中です。  
そのあたりの意見募集中です。

## 第5回 8人目の住人

季節は過ぎて、夏休みになった。

大学生はテストが終わってから、だいたい8月から長い夏休みになる。バイトもやりつつ、俺は暇を見つけて、隣人の女に声をかける。

「夏川、ちょっと付き合えよ」

露骨に嫌な顔をするその高校生を引つ張って、近所で評判のたこ焼き屋に連れて行く。奢りおこだと言っても、最初はなかなか信じてくれなかった。

「どういう風の吹き回しですか？」

なんて失礼な言い方なのだろうか。俺は無視をしてたこ焼きを食べ続ける。

3ヶ月間、俺なりに必死に考えてきた。そして、この寮で起こったことがなんとなく見えてきた気がする。

「お姉さんの仇をとるつもりか？」

「……………気づいてたんですね」

割とあっさりと認めた彼女はたこ焼きを一口で飲み込む。しばらく沈黙になる。

「何かわかったの？」

「何も……………ただ、あの屋上から落ちたことはわかっています。管理人さんに会えばわかると思ったんですが、全然見かけなくて……………」

「屋上があることはわかってたんだろ？」

彼女は小さくこくと頷く。俺はそれを黙って見ていた。夏川は真相を突き止めたらどうするつもりなのだろうか。仮に犯人がいたとしたら、その人に復讐するつもりなのだろうか。考えてみてもわからない。

ここへ連れて来て俺は何がしたかったのだろう。ふと疑問に思っ

た。

夏川が買い物に行くと言うので、俺は1人でつばめ荘に戻った。何を考えるわけでもなく、無心で階段を上っていると、1人の人間とすれ違った。

急にはっとした。今のは誰だ？

急いで振り返ると、その人物はいなくなっていた。ここに住む住人の友達かもしれないが、俺の意味不明な直感で友達ではないように思えた。

一瞬見ただけでは、若い男のようだった。少し茶みがかった髪。大学生だろうか。

8人目の住人。いや、正確には6人目の住人。

慌てて下に下りてみたが、結局その人を見つけることができなかつた。

「あ、おかえりなさい！」

平日、友達とサークル室で喋っていたら帰るのが夜中の1時を過ぎてしまったが、1階の大広間には菅原と広瀬、夏川の3人が一緒に勉強していた。こんな時間まで勉強なんて本当に受験生は大変だと思う。自分の頃の受験生活が思い出された。

「省吾さん、こんな時間まで学校ですか？」

愛想のいい菅原が真っ先に話しかけてくる。俺はみんなの方へ近寄っていった。

「ちょっと喋ってた。みんなまだ勉強なのか？」

「受験生に夏休みなんてないんです」

「立花は？」

「体調が悪いみたいで、もう寝てるんじゃないんですか？」

ふーんと俺が何気なく目線をずらすと、夏川にじっと見られていた。俺と目が合ったことに気づいた彼女は慌てて目をそらす。なんなんだ？

「今日の絵は貴婦人バージョンみたいだね」

広瀬の言葉に俺は彼女の向く方へ目をやる。すると、大広間に飾ってある絵があった。有名な人が書いたのかは知らないが、日傘を差した貴婦人がひまわりに囲まれて立っている。なんとなく違和感があるように見えるのは、貴婦人が立っている位置だろうか。横長の絵の割にはずいぶん左端に立っているように思える。

「昨日は貴婦人の隣に伯爵みたいな人が立っていたんです」

広瀬が俺に解説する。しかし、解説をされても、ますますわからなくなってしまうた。

「確か、一昨日は伯爵の隣にも貴婦人がいましたよね」

「ちよつと待つて。ハリー・ポッターじゃないんだから、なんで絵の中の人が減ってるんだよ」

「増えることもあるんです。何もいなかった砂漠の絵が、次の日30人以上の人がいる絵に変わったり。たぶん絵自体が変わってるんだと思うんですけど・・・」

「たぶん毎日管理人さんが変えてるんじゃないかな」

菅原も同意する。俺はもう何に対して突っ込めばいいのかわからなかった。ここでの生活に慣れすぎて、ひよつとしたらここの住人は些細なことでもいちいち驚かなくなったのかもしれない。慣れつつ怖い。

と、そのときだった。

「あれ？みんなしてまだ起きてたんスか？」

そんな声が出て、みんな振り返った・・・が、何かの違和感を感じて硬直してしまった。この言葉遣いは確かに立花渚のものだ。

そこにいたのは立花じゃなかった。いや、正確に言えば赤いゴーグルをつけた少年は立っていないかった。

「・・・誰？」

開口一番に呟いたのは菅原だった。それは、ここにいる人の代弁でもあった。

「誰って・・・俺ツスよ。立花・・・あれ？」

そう言って、自分の顔を押しさえる。

「もしかして、俺の素顔見るの初めてなんスか？」

「そうだよ。だっていつもゴークルみたいのつけてたじゃん」

そう、ゴークル少年じゃない。そこには、芸能人とかモデルみたいな端正な顔立ちの男が立っていたのだ。もし、ここに10人の女の子がいたら、8人は間違いなくかっこいいと思ってしまっただろう。っていうか、そもそもなぜゴークルを取った姿を誰も見たことがないのだろう。

「あ・・・俺がこないだ見た8人目の住人って立花だったんだ」

「えっ！？だから俺だけ見たことがなかったんスか・・・」

1人で納得した立花を夏川が見ているのがわかった。女はこういうのがタイプなのだろうか。だけど・・・なんとなく心の中で何かがざわめきだすのを感じた。こんな気持ち今まで感じたことがない。「もしかして、こないだ俺と階段の所ですれ違った？」

俺は自分の直感を思い出して聞いてみる。

「はい。でも、あのとき省吾さん考え事してたみたいだから声かけなかったんスよ」

なるほど・・・俺の中で1つあることが解決して、少しだけすっきりした気がした。だけど、なんとなく心の中でもややよとした何かが渦巻いていた。

翌日、俺はバイトへ行こうとすると、やっぱり偶然隣の部屋の夏川に会った。なぜか最近彼女との遭遇率が高い。

「ちっす。勉強はかどってるか？」

挨拶としてそんなことを聞くと、彼女は不機嫌な顔になってぷいっとそっぽを向いた。なんとなくその行為に傷ついた。

「そっちこそ今日は合コンですか？」

「違うって。バイトです」

そのまま彼女が家の中に入っていこうとするのを、俺はもったい

ないと思ってしまった。なぜだかもっと夏川と話していたかった。こんなふうに思ったことがないので、俺は戸惑ってしまった。そのままドアが閉じられる。そのドアの厚さだけ、彼女との距離が感じられてしまった。

この気持ちはなんだろう。

今まで思ったことがない。どうしていいのかわからない。だけど、もっと話したい。

そっか・・・

俺は自嘲気味に笑った。あることに気づいたから。

俺は夏川に恋をしたんだ。

## 第5回 8人目の住人（後書き）

次回はとうとう管理人さん登場です。

最終回になるか分けるかは  
まだ考え中です。

## 最終回 ファーストラブ

夏休みの後半、俺は初めて管理人さんと話す機会を得た。それは自分でもびっくりなほど突然の出来事だった。

昨日飲みすぎて昼まで寝ていたら、やかましいケータイの音で目を覚ました。特に相手を確認することもせず、電話に出ると、

『おはようございます。管理人の加持ですけど』

「ああ、はい。なんですか？」

俺は特に何も考えもせずに答える。しかし、頭が目覚めてくるとようやく電話の相手に気づいた。今、管理人って言わなかったか？

「管理人さん!？」

『え、はい。直接話すのは初めてですよね』

話し声からすると、管理人さんは女性のようだった。なぜか一瞬夏川の顔が思い出されたが、声が違うとすぐに気づいた。もちろん広瀬の声でもない。

『実は契約書のことで少しお話があるので、今日お時間頂けませんか?』

「もちろん、大丈夫です。今からでも大丈夫ですよ」

管理人さんに会える願ってもいないチャンスだ。俺はとにかくどんな人なのか確かめたかった。

話し合って、俺たちは今から管理人室で落ち合っことにした。

少し緊張しながら管理人室の扉をノックする。今まで1度だったその返事が返ってくることがなかった。しかし、今日は違う。どうぞという女の声と共にゆっくりと扉が開かれた。

中から顔を出したのは、いつか廊下で見たことがあったお嬢様のような女の人だった。この人が管理人さんだったのか・・・俺は驚きながらも、心の中では妙に納得していた自分がいた。

「はじめまして。管理人の加持です」

「どうも。佐伯です」

簡単な自己紹介を終えてから、俺は加持さんを観察する。やっぱりかわいい。失礼だが、とても管理人さんには見えない。

俺はテーブルに案内されて、お茶を淹れてもらった。なぜかこうもあっけなく姿を見れると、逆に目の前にいる人が管理人さんなのかどうか気になってしまった。

「今までご挨拶もできなくてすみません」

「いえ。俺こそ挨拶もしなくてすいませんでした」

とりあえずお互いに謝しておく。

「実は契約書のことでお話があつて今日はお電話いたしました。契約書には1年契約と書かれていましたが、ここはもうなくなってます」

「え・・・なんでですか？」

「ここに新しい施設を建てる計画がもう始まっていまして・・・夏休みが終わると同時にもう解体作業が行われることに」

「え・・・そうなんですかあ」

あちゃーっとの仕草をしているが、内心はもっと焦っていた。まさかこんなに早く追い出されることになるなんて思ってもみなかった。

「その後のことはこちらでなんとかします」

管理人さんは申し訳なさそうに頭を下げる。俺は慌ててそれを止めた。

「あの、ここみんなはどうなるんですか？」

「新しい寮のほうへ移っていたきます」

そうか。あいつらにはちゃんと居場所があるんだ。少しほっとしたが、俺はなぜか心はずしっと重いものがのしかかるのを感じた。なんだろう、この気持ち。この日常が終わることを俺はすごく嫌に思ってるらしい・・・

つばめ荘がなくなるといふ噂はあつというまに広まった。最初に

そのことを教えてくれたのは菅原だった。すでに管理人さんに聞いたことを言うと、むしろ彼女に会ったことのほうを驚かれた。未だに彼らは管理人さんに会っていないらしい。

変な寮だった。今まで見た中で一番ありえない場所だった。しかし、未練がないと言ったらウソになる。それになにより……  
「省吾さん」

そんな声と共に俺がいた大広間に現れたのは広瀬だった。

「ちょっとお話しませんか？」

そういえばこんなふうに広瀬と話すのは初めてかもしれない。俺はもちろん了解して2人で並んで座った。

「まだ告がないんですか？」

開口一番、一体彼女は何を言い出すのだろうか。俺がむせ込みそうになるのを無視して広瀬は話を進めていく。

「瑠璃のことが好きなことぐらいわかってますよ。お互いに両想いなになんで告がないんですか……」

「や、それはないから。絶対向こうは俺のこと嫌いだよ」

「バカですねー態度で筒抜けじゃないですか」

やたらと深いため息をつかれる。俺は言葉に詰まってしまった。わかんないんだ。どうすればいいのかが。たぶん人に恋をしたことなんて初めてだったから。失礼な話かもしれないが、今までよりもずっと本気で、ずっとわからなかった。

別に愛情がなくても、女の人と寝たこともある。俺に、恋愛は難しかった。

「簡単ですよ。好きって言えばいいんです」

「それが簡単にできれば苦労はしないよ。俺、夏川との関係、壊したくないし。向こうが俺を好きな保証はないし……」

「じれったいなーほら、瑠璃おいでよ！」

その声と共におずおずと物陰から姿を現したのは他でもない夏川だった。げっ……さすがに予想外の出来事に俺は戸惑ってしまう。意味もなく2人の顔を見比べたりして、拳動不審になってしまった。

「じゃあ、後は若い2人で」  
まるでお見合いの席のような言い方で広瀬は去っていく。  
俺たちは2人で残された。

しばらく何の会話もなかった。ただ、俺は頭の中で話さなければならぬことをずっと考えていた。

「聞いてたんだよ・・・ね？」

俺の問いに、夏川は静かに頷いた。広瀬は彼女が俺のことを好きだとか言っていたが、とてもそんなふうには見えない。俺自身、そんなにニブくはないと思う。

「そういうことだから・・・」

他に言葉が見つからない。女の人と話すのがこんなに難しいことだったなんて初めて知った。今までは合コンで初対面の人と普通に話せたのに。

やがて、夏川が口を開いた。

「あの・・・言っただけじゃなく、本当はお姉ちゃんが自殺した理由、受験ノイローゼじゃなくて失恋なんです」

「え・・・？」

「だから、私も男の人ってあんまり信用できなくて」

戸惑ったように彼女は俯いている。俺は夏川に向き直った。

「俺のことは信用してよ。俺、本気で人を好きになったのなんて初めてなんだ。悲しませないって約束する」

そのとき、初めて夏川がぼろぼろと涙を流しているのに気づいた。普段ハンカチを持っていない俺はどうすることもできずに、指で彼女の涙を拭う。至近距離で目が合った。

「私も好きです」

その言葉だけで嬉しかった。俺は彼女にキスをした。

その日は割とあっさりと訪れた。

「じゃあ、またな」

俺はまるで明日も会うかのような気軽さで言った。菅原も立花も広瀬もそして夏川も一瞬言葉を詰まらせたが、

「はい。また・・・」

それが俺たちの別れだった。

そして、月日は流れていき、俺たちはバラバラの人生を歩んでいくことになる。

高校生とのあの寮での出来事はやっぱり変わっていた。だけど、たった半年。されど半年。俺は濃い生活を送ることができたと思う。初めての恋も知ることができた。

つばめ荘は取り壊しがされ、そこには大きな図書館が建てられた。不思議な寮での秘密はまだわかっていない。しかし、あそこはそれでもいいと俺たちは思っていた。

## 最終回 ファーストラブ（後書き）

短い話でしたが、ここまで読んでくださって  
ありがとうございます。

またの機会に会えるように日々頑張っていきたいと思えます。  
読みたいと思えるような小説を書きたいです……

廉

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2475e/>

---

First Love

2010年10月8日15時49分発行